

## ＜報告要旨＞

近代イギリスの風刺文学の傑作である『ガリヴァー旅行記』（*Gulliver's Travels*, 1726）の作者として名高いジョナサン・スウィフト（Jonathan Swift, 1667-1745）だが、彼がアイルランド国教会の牧師であり、時代背景からしてもいわゆる「小説家」としてのアイデンティティを備えていなかったことは、一般にはあまり知られていない事実といえるかもしれない。中央政界で聖職者として成り上がりたい野心をもっていた彼は、ときの権力者を擁護する政治文書の執筆に励み、その筆力をアピールすることで出世を図ろうとした。最初に近づいたホイッグ党の領袖たちからはすげない扱いを受けたため、のちにトーリー党の支持に転じたことは、政論家としての彼を飛躍させる一大転機ともなった。

本報告では、そんなスウィフトの政治論・宗教論に光を当て、彼の教会・国家観を眺めることにしたい。国教会の牧師たるスウィフトが、カトリックに対しても非国教徒に対しても強い嫌悪感を隠さなかったことは今さら語るまでもないであろう。むしろ主眼となるのは、彼が他宗派に対して抱いていた忌々しげな思いが、各種の文書にどのようなレトリックをもって表現されているのかという点である。当代一流の文人の政見表明がいかなるものであったのかを、多少なりとも体感できる機会となれば幸いである。

議論の足がかりとしては、『ガリヴァー旅行記』とならぶ代表的な散文作品の『桶物語』（*A Tale of a Tub*, 1704）をとりあげる予定である。作中でスウィフトが目敵にしていた、トマス・ホッブズ（Thomas Hobbes, 1588-1679）の『リヴァイアサン』（*Leviathan*, 1651）にも可能な限り言及したい。